慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料とその意義
Sub Title	Outline of Zenshiro Tsuboya collection in Kamo City Library and its significance in the history of Japanese libraries
Author	吉田, 昭子(Yoshida, Akiko)
Publisher	三田図書館・情報学会
Publication year	2009
Jtitle	Library and information science No.62 (2009.) ,p.145- 165
JaLC DOI	
Abstract	【目的】本研究の目的は，新潟県加茂市立図書館が所蔵する坪谷善四郎関係資料の概略と特色を把握し，その図書館史研究上の意義を明らかにすることにある。坪谷善四郎は大橋図書館（現三康図書館）の図書館長を務め，東京市議会議員として，東京市立日比谷図書館の設立に貢献した人物として知られている。 【方法】加茂市立図書館所蔵坪谷善四郎関係資料の調査を実施し，その資料種別，各種別の内容および特色，保存状態を検討した。さらに，現在三康図書館が所蔵する坪谷善四郎関連資料と比較し，現存する坪谷関係資料の全容を推定した。 【結果】加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料とは，坪谷が郷里加茂に寄贈した自筆資料や坪谷収集資料類である。自筆日記，雑稿類，加茂町立図書館寄贈台帳，写真集・アルバム・旅手帳，回顧録，絵葉書集，名士書簡類などからなる。たとえば，日記と雑稿類は，坪谷自筆の活動日誌や雑誌などに掲載した原稿類を集めたものである。それぞれ推敲や修正の形跡がみられ，図書館史上の歴史的事実を確認することや，坪谷の思考のプロセスをたどることができる。今回の調査の結果，坪谷善四郎関係資料は，現在未整理のままではあるが，豊かな内容を持ち，東京市立図書館をはじめとする，わが国図書館史研究の第一級史料であることが明らかになった。
Notes	原著論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00003152-00000062-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Library and Information Science No. 62 2009, p. 145–165.

原著論文

加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料とその意義

Outline of Zenshiro Tsuboya Collection in Kamo City Library and its Significance in the History of Japanese Libraries

吉 田 昭 子
Akiko YOSHIDA

Résumé

Purpose: This study examined the outline and features of the Zenshiro Tsuboya collection in Kamo City Library, Niigata Prefecture, and its significance in the historical study of Japanese libraries. Zenshiro Tsuboya was the director of Ohashi Library (now Sanko Library of the Sanko Research Institute for the Study of Buddhism). He was an assembly member of Tokyo City Council and helped to set up the Tokyo Municipal Hibiya Public Library.

Methods: The material type, contents, traits, and state of conservation of the Zenshiro Tsuboya collection in Kamo City Library were investigated. The overall size and content of all material left by Zenshiro Tsuboya were estimated by comparing the collections of Kamo City Library and Sanko Library.

Results: The Zenshiro Tsuboya collection in Kamo City Library mainly consists of manuscripts written by him and materials collected by him. Tsuboya donated them to his hometown, Kamo. The collection includes his own handwritten diaries, manuscripts and memos on various topics, the book ledgers of Kamo Library, photographs, photo albums, travel journals, memoirs, postcards, and letters from men of distinction. Its importance is evident, for example, in the diaries of his own activities and manuscripts of articles published in journals and other media. These show evidence of improvements and modifications which will be useful for confirming historical facts and tracing the changes in Tsuboya's views. It is concluded that these materials, which are still to be examined in detail and organized, are outstanding historical materials concerning Japanese library history, including the history of Tokyo City Library.

吉田昭子：慶應義塾大学大学院文学研究科
Akiko YOSHIDA: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, 2–15–45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108–8345, Japan
e-mail: ayoshida@a3.keio.jp
受付日：2009年3月31日　改訂稿受付日：2009年8月10日　受理日：2009年8月25日

I. はじめに
A. 本研究の目的
B. 坪谷善四郎の経歴
C. 坪谷善四郎の図書館史における位置
D. 調査の必要性
II. 調査結果
A. 対象資料
B. 調査方法
C. 種類別の個別の特色と保存状況
III. 坪谷善四郎関係資料の意義
A. 歴史的事実の確認
B. 史実の修正と新たなる史実の発見
IV. おわりに

I. はじめに

A. 本研究の目的

新潟県加茂市立図書館の正面玄関には，「日本図書館界育成加茂市立図書館創立功労者坪谷善四郎先生像」と書かれた胸像が設置されている。この胸像の人物である坪谷善四郎 (1862–1949)[1] は，新潟県加茂町に生まれ，政治家，出版人，図書館功労者でもあった。旅行を好み写真術も巧みで，その生涯で多くの著書を残した。自身の苦学の経験に端を発し，生涯を通して図書館設立や振興に力を注ぎ，近代日本の図書館史において，明治から昭和にかけて多大な足跡を残した人物である[2]。

坪谷は，明治 35 年 (1902) 6 月には，私立大橋図書館（三康図書館の前身）の開館に携わり，明治 37 年 (1904) 3 月には東京市議会議員として，東京市立図書館設立建議の決議に貢献した。市立図書館のなかった東京で，東京市立日比谷図書館の創設に重要な役割を果たし，さらに明治 39 年 (1906) には郷里加茂に図書を寄贈している。坪谷は加茂尋常高等小学校の中に新潟県内第 1 号の公立図書館となる加茂町立図書館の建設に導いた人物でもある。その後も加茂に図書の寄付を続け，昭和 16 年 (1941) に独立の図書館が建設された[3]。平成 3 年 (1991) に，現在の加茂市立図書館が建設された際，その功績を顕彰し坪谷の名前を冠し坪谷文庫という郷土資料室が図書館 2 階に設けられた。

しかし，ここで注目すべきことは加茂市立図書館に，この郷土資料室の資料とは別に坪谷自身が寄贈した自筆日記や原稿類，名士書簡類などで構成された坪谷善四郎関係の一次資料が保存されていることである。郷里の文化向上を目指して寄贈されたこれらの坪谷善四郎関係資料は，現在未整理の状態にある。昭和 62 年 (1987) に是枝英子[4] により，郷里の加茂市立図書館の書庫中に遺稿集や日記類が存在することが紹介されたものの，その後これらの資料類の内容が広く紹介されることはなかった。

本稿の目的はこれまで十分紹介されることがなかった新潟県加茂市立図書館所蔵の坪谷善四郎関係資料に関する概略や全体像を概観する予備的調査を実施し，その種別や個別の特色，内容，保存状況等から資料が持つ特色や意義を明らかにすることである。本論文では，特に図書館史研究上における坪谷善四郎関係資料の重要性について考察する。

B. 坪谷善四郎の経歴

坪谷善四郎の経歴を語るうえで伝記的資料として常に取り上げられるのが，加茂市立図書館後援会が昭和 24 年 (1949) に刊行した『水哉坪谷善四郎先生傳』[5] である。このほかに，雑誌類に執筆した原稿類から経歴にかかわる諸篇を集め，昭和

13年(1938)に坪谷の喜寿を祝って博文館から出版された『随筆回顧集』[6]がある。

これらの記述によると，坪谷は文久2年(1862)2月に現在の新潟県加茂町に生まれ，水哉と号し昭和24年(1949)3月に87歳で没している。生家は加茂川での木綿晒しや農業を本業とし，幼少の頃から学問を好み家業を手伝いながら独学自習を続けていた。明治18年(1885)，23歳のときに新潟を出て上京，現在の早稲田大学の前身である東京専門学校に入学する。同郷の大橋佐平によって設立された博文館に，明治21年(1888)東京専門学校在学のまま館員となった。博文館は，図書，雑誌の出版社であり，のちに出版事業に付帯する洋紙販売や印刷製本などを含めた総合事業を行った。彼は，この博文館の編集局長や取締役を歴任，その中心的役割を担い続け，昭和12年(1937)には『博文館五十年史』[7]を執筆している。

坪谷は東京専門学校政治経済科と行政学科を卒業，明治32年(1899)2月牛込区議会議員，明治34年(1901)5月には39歳で東京市議会議員に当選している。牛込区議会は大正15年(1926)2月まで東京市会は大正11年(1922)6月まで務めた。博文館における出版，著述，牛込区や東京市議会議員としての政治家活動を背景に，大橋図書館長や日本図書館協会会長などで活躍し，明治から昭和にかけての日本の図書館界において広範で重要な業績を残した[8]。

坪谷と図書館とのかかわりは，明治26年(1893)に博文館創業者大橋佐平が，私立図書館である大橋図書館の建設を目指したことに始まる[9]。米欧巡視後，佐平は出版業者として公益に奉仕する道が公共図書館の設立にあると考えた。しかし，図書館の完成半ばに死去，嗣子新太郎がその遺志を継いで，明治35年(1902)6月に博文館創立15周年記念事業として，財団法人大橋図書館が開館する。坪谷は大正6年(1917)から昭和19年(1944)まで大橋図書館長を務め，図書館計画や運営面でそれに貢献し支え続けた[10)〜12)]。

坪谷は，明治22-23年(1889-1890)頃に上野の東京図書館（帝国図書館の前身）を利用し，大橋図書館の開設に携わる中で図書館の功用を如実に知った。明治35年(1902)当時の東京には，わずかに国立の帝国図書館と私立の大橋図書館と帝国教育会図書館とがあるのみで市立図書館がないことを憂え，明治35年(1902)10月に雑誌『東京教育時報』に「東京市立図書館論」[13]を発表した。東京市立図書館の必要性や設立・維持方法，日比谷公園での図書館設立などを提案し，さらに明治37年(1904)3月には東京市議会議員として通俗図書館設立建議を提出し決議にこぎつけた。

坪谷の尽力で通過したこの通俗図書館設立建議を発端に，明治39年(1906)7月28日に市会において建設予算が可決される。これが明治41年(1908)11月の東京市立日比谷図書館設立の契機となった[14)〜16)]。昭和10年(1935)の「東京市立図書館創立の由来」[17]の中で，坪谷は自身の東京市議会議員在職中の後世に伝うべき功績として「東京市立図書館創立」を挙げ，東京市会において通俗図書館建設費予算が可決された7月28日は「東京市立図書館の記念日」といってもよい日であると述べている。さらに，大正4年(1915)東京市に御大礼記念として下賜された金100,000円を基金として，その利子である約5,000円を図書館特別図書費にあて，江戸開府以来明治に至るまでの東京市研究に価値ある資料を日比谷図書館で収集するきっかけをつくったのも坪谷であった[18]。この間，郷里加茂でも町立図書館を設置するための図書や現金の寄付を続けていた。

また，大正7年(1918)には日本図書館協会会長に就任，大正9年(1920)12月[19),20)]に退任している。その後，大正12年(1923)の関東大震災で大橋図書館は類焼全壊し，蔵書のすべてを焼失した。坪谷は精力的に図書収集を進め，大正15年(1926)に図書館を復興し開館した。

C. 坪谷善四郎の図書館史における位置

坪谷善四郎の図書館史における位置を論じるうえで，重要な点として次の2点が挙げられる。第一は東京市立図書館，特に日比谷図書館設立に対する貢献に関するもの，第二は坪谷のユニークな図書館観である。

東京市立図書館設立における業績に関しては，日比谷図書館の記念誌である『五十年紀要』[14] の中で，坪谷は東京市立日比谷図書館創設の立役者の一人として取り上げられている。東京市会議員として市政に尽くし，東京市立図書館の建設に最も力を注ぎ，明治 35 年 (1902) には東京市立図書館論を発表，広く市会や教育界首脳者の啓発にあたったとしている。

また，佐藤政孝は，『市民社会と図書館の歩み』[21] で，東京市の図書館の起源をたどるときに忘れてはならないキーパーソンとして，寺田勇吉 (1853–1921) と坪谷善四郎を挙げている。この二人により，識者を中心とした市民の世論形成はかなりの成果を収めた。世論の盛り上がりをいっそうかきたてたのが大橋図書館における坪谷の実績である。坪谷が大橋図書館の経営実務実績と東京市議会議員としての政治的基盤をもとに，図書館発展政策を積極的に推進し，東京市立日比谷図書館，深川図書館，簡易図書館の建設に導いた業績は大きいとしている [22]。

さらに『図書館の発見』[23] で石井敦は，坪谷善四郎が大橋図書館の館長と市会議員の経験を背景に市立図書館の設立推進を行い，明治末から大正初期の大きな市立図書館網をしくまでの原動力となったとして長年にわたる坪谷の影響力に着目している。

次に，永末十四雄は『日本公共図書館の形成』[24] の中で，坪谷の出版業者としての側面と図書館長としての経験を踏まえたユニークな図書館観を高く評価している。出版量の増大が個人の資力による図書購入の限界をもたらし，図書館の必要性が高まっていること，教育研究だけではなく，市民の日常的課題解決のための図書館利用を提唱している坪谷の先見性や入館料を徴収し図書の購入にあてるなどの実業家らしい側面に注目している。

『公共図書館サービス・運動の歴史』[25] で，奥泉和久は，坪谷が大橋図書館の利用分析をもとに，市民の図書館利用条件として，図書館との距離や交通手段といった都市機能が大きく関係すると述べた点を特に高く評価している。『図書館の発見』[23] で石井は，坪谷が大橋図書館の利用統計の実態から，利用者の大半は麹町区で，隣区神田，牛込を合わせると 8 割近くになり，1 区に 1 つは図書館が必要であることを証明した点で，科学的利用統計分析の視点を持ったことを評価している。さらに佐藤は，明治 40 年 (1907) 9 月から翌 41 年 (1908) 4 月に欧米巡視旅行で体験した図書館の発展状況を参考に，日本における図書館の振興に力を注いだとしている [21,22]。

森崎震二，是枝英子は「明治期の図書館論について－坪谷善四郎と雑誌『太陽』の論調」[26] で，雑誌『太陽』において図書館関係論文の紹介に関する坪谷の役割について言及している。坪谷が雑誌編集に携わっていた時期に図書館関係の論文が多くみられ，その背景に坪谷の存在，影響があることを指摘している。森崎，是枝は坪谷を『図書館雑誌』の創刊以前，図書館の発展を国民にアピールする手段を持たなかった図書館界にとって，広く世界および日本の図書館界の現状を知らせ，図書館の役割を啓蒙する役割を果たした雑誌を編集刊行していた人物として評価している。

坪谷自身が著した『大橋図書館四十年史』[12] で，坪谷は大橋図書館の利用実績に基づき，東京市会における図書館設立建議を提出し，日比谷図書館の設立，続いて深川，京橋，一橋などの図書館が設立，二十有余の東京市立図書館建設に結びついたと記している。また，石井宗次の「坪谷先生と図書館事業」[19] によれば，坪谷は明治 40 年 (1907) 8 月の図書館講習会を開催したり，図書館事業を普及発達し，少国民に図書館の知識や利用習慣をつけさせるため国定教科書中に図書館に関する一課を設けることを提唱している。

このように坪谷は図書館長や議員として，東京市立図書館の発展に多大な影響を及ぼしただけではなく，私立図書館用地に関する免税措置の関係法規の改正要望や建議陳情など，多角的方面で図書館界において先駆的役割を果たした人物と考えられる。

D. 調査の必要性

坪谷善四郎は，すでに述べたように東京市立図書館の発展だけではなく，日本の図書館の先駆

者，功労者としての役割を果たした。しかし，坪谷の先駆者としての役割は，必ずしも十分理解されているとはいえない。第Ⅰ章C節で触れた文献をはじめとして，坪谷に関する先行研究の多くが，刊行資料や伝記を典拠として展開されてきた。坪谷が日本図書館史で果たした役割や幅広い業績を明らかにするには，残された一次資料を典拠とした研究が不可欠である。

坪谷善四郎関係の一次資料は，現在，三康図書館と加茂市立図書館が所蔵している。いずれも坪谷に関する伝記や全集の刊行のための資料として，坪谷自身が寄贈したものである。三康図書館所蔵資料は，主として大橋図書館に関連したものであり，坪谷自身の事蹟に関する資料の主体となるのは，新潟県加茂市立図書館所蔵の一次資料であるが，三康図書館所蔵の一次資料と関連するものもみられる。そこで，本稿では加茂市立図書館所蔵資料を中心に検討し，関連性のあるものについては，三康図書館所蔵の資料も取り上げることにする。

II. 調 査 結 果

A. 対象資料

1. 加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料の成り立ち

加茂市立図書館所蔵の坪谷善四郎関係資料とは，坪谷が郷里の加茂に文化の向上支援の一環として寄贈した坪谷自筆の日記や原稿類を指している。加茂市立図書館によれば，これらの資料は，昭和20年(1945)から23年(1948)にかけて図書館資料として登録され受け入れられた。現在書庫内に保存されているが，未整理のため，図書館が作成した目録類はない。

『水哉坪谷善四郎先生傳』[5]では，坪谷の戦時中の状況について，次のように書かれている。昭和20年(1945)3月19日に牛込区北山伏町の坪谷の本宅から強制疎開を命じられ，急遽，多年収集した和漢の書籍，書画骨董を稲毛の別荘に運んだ。重量のものは，牛込区南榎町に住んでいた，甥の鉱床学者坪谷幸六(1895–1971)方へ託したが，昭和20年(1945)5月25日の空襲で焼失してしまった。坪谷自身は，昭和20年(1945)4月に加茂に疎開し，加茂図書館を訪れ，その盛況を喜び，疎開の際に携えていたものと稲毛の別荘に残された書籍，書画，幅，色紙，短冊，諸名家の書簡類など，半世紀にわたって収集したものを図書館に寄贈した。そのうちの数百通の書簡類は坪谷自身が購入または知友から寄贈されたものであるが，その大多数は明治，大正，昭和の三時代にわたり，坪谷にあてられたものであった。これらは，大臣，大将，政治家，軍人，学者，作家，財界人，書家，画家，詩人，歌人，俳人，閨秀名家，芸術家など有名の人々の筆になるものが多く，他年加茂図書館の一特色になることを期して寄贈されたものである。この『水哉坪谷善四郎先生傳』の記述からも，加茂市立図書館に残る，日記，書簡類などを寄贈したのは，坪谷自身と考えられる。

2. 三康図書館所蔵坪谷関係資料との関係

坪谷が大橋図書館長を務めたことから，坪谷関係資料は三康図書館にも残されている。坪谷は昭和19年(1944)には大橋図書館長を辞任，昭和24年(1949)3月に死去[27]した。その後，大橋図書館は西武鉄道創設者の堤康次郎により引継がれ，昭和32年(1957)に三康図書館と改称，東京都港区芝公園に移転し昭和41年(1966)に一般公開が開始された[10]。

三康図書館蔵書目録[28]では，坪谷関係の資料は，坪谷善四郎の項目の下に，「水哉自伝旅等の稿本類」「各地で採集した花葉類を集めた朱印帖類」「坪谷善四郎氏宛書簡類」「坪谷善四郎収集書簡」「書幅」「その他」の6種類に分けられている。第II章C節でみる加茂市立図書館所蔵の坪谷善四郎関係資料と異なり日記はみられないが，稿本など，内容面で両図書館資料に重複がみられる。

終戦前の時期には，貴重書を戦火から守るために，三康図書館と加茂図書館との間に資料のやりとりが行われていた[29]。坪谷研究にとって，加茂市立図書館と三康図書館に残された資料はともに欠くべからざる資料である。それぞれの研究だ

第1表　坪谷関係資料の種類と資料数

種　　類	資　料　数
自筆日記	54
雑稿類	40
加茂町立図書館寄贈台帳	5
写真集・アルバム・旅手帖	32
回顧録	8
絵葉書集	13
色紙等	43
名士の書簡類	不明　12袋

けではなく，その関連性についても今後研究を重ねていく必要がある。

B.　調査方法

調査では坪谷善四郎関係資料類として残されている加茂市立図書館所蔵の資料類を閲覧し，どのような種類の資料が存在するのかを明らかにするとともに，それに基づいて各資料の分類を試みた。内容を比較しながら，種類，資料数，それぞれの特色や概略を調査した。

今回の調査にあたって閲覧することのできた資料は，自筆日記（54冊），雑稿類（40冊），加茂町立図書館寄贈台帳（5冊），写真集・アルバム・旅手帖（32冊），回顧録（8冊），絵葉書集（13冊），色紙等（43冊）に分けることができる。さらに，そのほかに，12袋に分けて入れられた，多量の名士の書簡類などが存在することがわかった（第1表）。

C.　種類別の個別の特色と保存状況

1.　自筆日記

自筆日記は坪谷自筆の日記で，その活動記録である。明治29年(1896)を欠いているものの，明治26年(1893)から昭和22年(1947)，亡くなる2年前までの日々をつづった54冊が揃っている（写真1。写真はp. 157から掲載。以下，同様）。坪谷は博文館の当用日記[30),31)]を多用し，1年1冊単位で，毛筆とペン字の両方を用いて記録していた。最初の明治26年(1893)は，「吾家の歴史」と題した日記で，明治25年(1892)11月に発売された縦16センチ，横12センチのやや小ぶりの日記に記されている。また，第二次世界大戦末期の昭和20年(1945)には，物資不足で昭和8年(1933)版の経済日記を転用していた。

明治31年(1898)の日記からは，見返しや標題紙余白部分などに，坪谷自身による「摘要」等と題した各年の主な出来事の日付と項目を個条書きに整理した記述がみられるようになる（写真2)。さらに，標題紙に「校了」などの文字が記されているものがみられる。日記冒頭部分の標題紙や見返部分に重要項目をまとめたのは坪谷自身であり，特に重要と考えられる項目には，竹の筆の軸部分に朱肉をつけて押したような直径7ミリで太さ1.5ミリの赤い丸をつけている。加えて，本文該当部分には同じ赤い丸が押されている。

これらの日記類については，保存状態からみるといずれも表紙裏や見返し部分の酸性化が進んでおり，紙が茶色に変色している。明治37年(1904)の見返し遊び紙では右上に赤丸を付し，「此年一月二十八日の東京市会へ市立図書館新設建議提出三月七日ノ市会にて全會一致可決」という記述がみられる（写真2)。本文の該当個所をみると，1月28日には午後4時より東京市会とあり，市会へ市立図書館設立建議提出したという記述に赤丸がつけられている。同様に3月7日は東京市学務委員会，東京市会に出席し，自分が提出した市立図書館建設の建議が全会一致で通過したと記した記述に赤丸がついている（写真3)。

明治40年(1907)9月に坪谷は欧米各国巡視に出発し，翌年4月に帰国している。この年の9月4日の日記には，次のように記されている。

> 前夜驟雨一過朝来快晴　此日横浜出航信濃丸ニテ世界週遊ノ途ニ上ル　見送者極メテ多シ（縦波線）是より以下仁藤安治氏記録　宅よりは奥様，英五郎様，かね様，仁藤，甚作，以上横浜迄お見送り，主人，午後二時，無事御乗船御発航。早稲田貸家唐紙修繕出来（写真4)。

文中には縦に波線が挿入されており，坪谷が出発前に書いた部分と，以後，欧州旅行出発後に仁藤が代理で記録した部分を明確に分けている。内容的には，仁藤は見送りと早稲田の貸家の修繕について記している。

明治41年(1908)の日記巻頭に記された適要は，「元旦伊太利ミランに越年，四月二日東京新橋駅着帰京」に始まり，図書館関係の記述としては，「十月十日南葵文庫開館式，十一月十六日日比谷図書館開館式」に赤丸が付されている。該当の11月16日は月曜日，天気晴れ，坪谷は博文館に出勤し，朝に石黒邸と番町の大橋邸を訪問，石黒邸に婚礼祝を贈り，午後日比谷図書館開館式に臨み，夜は市会議員補欠選挙の件で協議している。

これらの記述からみても，この日記が坪谷の日々の心情をつづる目的ではなく，事務的備忘録としての記録的要素が強い資料であることがわかる。坪谷は何度も校正を行っており，日々の日記を後年読み直して，後に伝記などを作成するために重要な出来事を整理したと考えられる。日記には各所に加茂図書館へ雑誌や図書の寄贈をした記述がみられる。坪谷には加茂図書館に図書や雑誌を寄贈するだけではなく，自筆日記をあわせて寄贈することで，それらを後世の歴史的研究に役立たせようする意図があったと考えられる。

昭和13年(1938)の巻頭や昭和18年(1943)の巻末には，坪谷の印譜（写真5）が付されていたり，各日記巻末には資産調査や財産目録と題して，家財家屋，貯蓄などの記載もある。また，昭和10年(1935)の四谷税務署長宛ての金額申告書などが挿入されていたり，明治30年(1897)の日記巻末補遺部分には，1月1日の年始状発送人名簿もみられる。さらに，加茂図書館への図書寄贈の記録も含まれている（写真6）。

このことは，この日記がそれぞれの年の金銭出納や資産整理のための備忘録であったことを示している。そのときどきの坪谷の経済や生活状況を知るうえでの貴重な資料であるばかりではなく，政治家，出版人，図書館長などとしての幅広い人脈をたどるうえでも有用な資料となっている。

2.　雑稿類

『水哉雑稿』と題した，第1から第34，別冊1から3で構成された自筆原稿や雑誌類に掲載された記事などを切り抜いた和綴のスクラップ類がみられる（写真7）。各冊ごとに表紙と題箋がつけられ，背には「第一編　日本めぐり」，小口にも「水哉雑稿　一」と記され，それぞれ標題紙と目次がつけられている。本文は和紙や博文館編集部関係の原稿用紙などを用いて書かれている。

図書館に関係したものとしては，『水哉雑稿』第9編に，大正12年(1923)から13年(1924)に関する内容で「大震火災其翌朝の焼跡巡り」（写真8）と題した文章がみられる。関東大震災の当日の様子と翌日，大橋図書館や大橋邸に向う途中の都心の被害状況が克明に描かれている。この地震で大橋図書館は全壊焼失，開館後22年間に坪谷が収集した蔵書100,000冊や大橋乙羽や尾崎紅葉の遺愛書もことごとく失われた。大橋図書館館員は，カード目録と諸帳簿を持って靖国神社に避難していたが，平時は貴重なカード目録も肝心の図書が失われては何の用もなさないと落胆している。

大橋図書館の罹災については，『水哉雑稿』別冊1に「大橋図書館の焼失」（写真9）と題した震災時の体験を記した文章も残されている。大正12年(1923)12月の『図書館雑誌』54号に掲載された同じ題名の文章[32]とは書き出しも異なり内容的には短い。このほか，大橋図書館に関する文章としては，『水哉雑稿』別冊3に，「復興せる大橋図書館」「大橋図書館復興の由来」「復興せる大橋図書館の設計」もみられる。

第34編には，坪谷の図書館雑誌への掲載号一覧や各種功労表彰記録がつづられている。第18編には，「図書館の発達と本県人の功労」と題した記事が張り込まれている。緑蔭生と署名のあるこの記事には，新潟毎日新聞昭和4年(1929)11月8日と日付が書き込まれている。読書デーにちなみ，新潟県の図書館事業に大きな貢献を残した人物として，市島謙吉と坪谷善四郎の二人が取り上げられている。市島は，日本図書館協会の前身である日本文庫協会や早稲田大学図書館の中心的

人物，その後輩である坪谷は大橋図書館，加茂町立図書館，日本図書館協会での貢献が高く評価されている。坪谷はこの切抜記事でも，日記にみられる赤丸をつけており，校正を加えている。

図書や雑誌など，著作の多い坪谷の業績を正確にたどることは難しく，雑稿類はそうした文筆活動や政界での細部にわたる活動業績を網羅的に収集した資料ということができる。三康図書館所蔵の自筆回顧録『水哉自伝旅ころも』[33] の第 10 編の「博文館五十年史編纂着手」によると，早稲田大学人事顧問嘱託を辞した坪谷は，『博文館五十年史』[7] の編纂に着手する。その際に大正 9 年 (1920) 以降の各種雑誌に掲載した，随筆，評論，紀行，史伝など数百編を写し，または切り抜いて張り，30 余編の『水哉雑稿』を作成したのである。

また，『水哉自伝旅ころも』[33] の結語で，坪谷は次のような内容を述べている。80 歳になって同年輩の人々の多くが故人となり伝記が出版されて送られてくるが，それが故人の満足あるように真相を伝えているかは疑わしい。故人自らが語るのではなく死後に集めたものによるからである。自身が過去の経過を書き起こしておけば，遺族の編集の労が省けるだけではなく，最も正確な資料を残すことができる。死後の伝記出版の有無にかかわらず，誤った事実を伝えられる恐れは防ぐことができ，子孫の訓戒にもなるというのである。そこには，自筆日記同様の一次記録を残す必要性への坪谷の着目と主張がみられる。

3.　加茂町立図書館寄贈台帳

加茂町役場の坪谷善四郎寄贈図書送付簿や書類綴などの台帳類が残されている（写真 10）。図書と雑誌の寄贈リストからなり，版心部分に「新潟県南蒲原郡加茂町役場」と書かれた用箋を袋とじにしたもので，受付年月日，種目，実価，備考欄を設け，備考欄には著者が記載され，欄外に印鑑が押印されている。

明治 39 年 (1906)，坪谷は加茂に町立図書館を開設することを勧めた。図書館建設に関する寄付の方法は，日露戦争記念のために適宜な場所に図書館を建設し，実価 1,000 円に相当する図書を寄付すること，加茂町には図書を安全に保管し，閲覧室を設けて公衆の縦覧に供してほしいことを申し出た。1,000 円の図書寄付を加茂町長は議会の承認を得て受け入れ，寄付が実行された。月ごとに図書雑誌が寄贈され，大正 2 年 (1913) までに 1,000 円分の図書寄贈が完了した。当初は小学校の一室があてられた。坪谷は町立図書館建築資金の一部として 10,000 円の寄付を申し出て，昭和 16 年 (1941) には新築の加茂町立図書館が開館する。

現在加茂市立図書館に残っている台帳は，大正年間から昭和 15 年 (1940) の台帳類である。独立の加茂町立図書館設立前までの寄付記録をとじたものである。

なお，このほか加茂図書館の設立に関する資料として，加茂町役場の用箋に『昭和十五年度図書館建設工事日誌』と書かれた監督技手早川幸次郎による工事に関する記録も含まれている。

坪谷が郷里加茂の文化向上，図書館振興にかけた熱意は大きなものがあった。この寄贈台帳は坪谷が郷里にどんな資料を備えた図書館を設立したかったのか，その意図を知るうえからも，非常に貴重な資料となっている。大正から昭和にかけて，震災や戦災を経て多くの資料が散逸し失われた。この寄贈台帳類は，坪谷が加茂町立図書館に寄贈した資料のリストとしての意義だけではなく，そうした大正年間から昭和 15 年 (1940) の図書や雑誌の出版状況を知るうえにも重要な資料である。

4.　写真集・アルバム・旅手帖

坪谷は旅や俳句を好み，日本全国，東西両半球を旅行した。『旅の家づと』は，題箋に昭和 10 年 (1935) よりと書かれており，各地のスタンプなどを集めて，張り込んだものである。昭和 10 年 (1935) に戸隠神社に参拝した記念として，ブナや楓の葉を採取し，押し葉にして張り付けている。三康図書館に残されている坪谷関係資料についての蔵書目録にも，同名の『旅の家づと』と題した 2 冊の資料がみられる。昭和 3-5 年 (1928-1930)

に各地で採集した花葉類を張り込んだものと，昭和5年(1930)の吉野，天の橋立，永平寺などで採集した朱印や花葉類である。加茂市立図書館所蔵の資料も，同じように昭和10年(1935)頃作成されたと考えられる（写真11)。

坪谷は明治33年(1900)に写真を始め，自ら撮影し，写真アルバムを作成した。坪谷が写真にかかわるようになるきっかけは，小川一真(1860-1929)が写真製版の利用を博文館の大橋新太郎(1863-1944)に勧め，『日清戦争実記』[34]が出版されたことにある。日清戦争以前は新聞雑誌の記事への写真の利用がなかったため，人物写真や戦況写真を掲載した『日清戦争実記』は好評を博した。このときのアマチュア写真界の功労者が大橋乙羽(1869-1901)であった。しかし，明治34年(1901)の大橋乙羽の死により，坪谷が博文館の編集と写真部を兼任することになる。

明治33年(1900)北清事変（義和団の乱）従軍以降，坪谷は旅行に写真機を携帯するようになる[5]。明治33年(1900)9月に，北清事変地方視察のために経済学者で史論家でもあった法学博士田口卯吉(1855-1905)とともに，仁川や京城を訪れている。坪谷の朝鮮視察は，明治33年(1900)から大正にかけて8回に及んでいる。これらの写真は，明治33年(1900)の仁川の日本人倶楽部や仁川港の日本専管居留地や釜山の日本領事館の様子を写したものなど100年以上前の状況を記した非常に貴重なものである。写真12は慶福宮勤政殿前での記念撮影である。すでに劣化がかなり進んでおり，貴重な記録なので，写真撮影やデジタル化などの資料保存の観点からの手立てを行なう必要がある。

加茂市立図書館所蔵の『関西紀行』は昭和18年(1943)4月の孫正二との伊勢両宮参拝について書きつづったものである。坪谷はこの旅行を久しく病床にある大橋新太郎君の病気平癒祈願をかねていると記している。出発前の準備特急券の調達なども詳細につづっており，自筆日記にみられる記述の傾向よりもはるかに詳しい書き方になっている。ノートに記された『関西紀行』の茶色に変色した表紙には，「戦時中の用紙の貧弱を見よ」と書かれている。戦時中の物資状況を歴史的に伝えようとした坪谷の意図がみられて興味深い。

5. 回顧録

昭和21年(1946)の日付のある回顧録『回顧八十五年』（写真13)[35]は和綴8冊8編で構成されている。坪谷の新潟や東京での生活の様子がつづられている。第1編から3編の表紙の題名は『過ぎ来し跡』と墨で一端書かれ，その後『八十五年の回顧』と訂正されている。本文の巻頭では，「回顧八十五年」と訂正され，回顧録の題名を何回も推敲している様子がうかがえる。本文は，毛筆で書かれ，朱墨で校正が加えられている。

第1編は坪谷が加茂での生誕から郷里を離れて上京するまでの23年間，第2編では壮年期として明治19年(1886)の東京専門学校入学から明治26年(1893)までの出来事をまとめている。第3編では明治27年(1894)から28年(1895)の日清戦争，第4編は明治37年(1904)から38年(1905)にかけての日露戦争の前後と戦争を契機とする変化を記している。第5編からは「東京市政熱中時代」として，明治34年(1901)に市議会議員当選以降，東京市会議員勤続功労者として表彰される大正4年(1915)までを対象としている。図書館関連では，東京市立図書館設立のための建議を提出，明治37年(1904)から明治41年(1908)の東京市日比谷図書館創設に結実する努力を重ねていく時代にあたる。「波瀾時代」と題した第6編は，大正6年(1917)の衆議院の落選や大正12年(1923)の関東大震災による大橋図書館の被害など，坪谷にとっては多くの困難が度重なる時期にあたる。第7編は震災による壊滅的打撃を克服し，大正14年(1925)の大橋図書館復興に向かう時代にあたり，最後の第8編は晩年の昭和7年(1932)から昭和24年(1949)頃の活動が中心となっている。

三康図書館にも『水哉自伝旅ころも』[33]と題した坪谷善四郎自筆の回顧録が残っている。こちらは，全6冊で構成され，400字詰の原稿用紙を袋とじし，ペンで書かれた和綴の資料である。

第2表　目次の比較表

時期	『水哉坪谷善四郎先生傳』[5] （昭和24年刊）	『回顧八十五年』[35] 昭和21年執筆（加茂市立図書館蔵）	『水哉自伝旅ころも』[33] 昭和18年執筆（三康図書館所蔵）
40歳代前半	第4編 「日露戦争前後」 大橋図書館開館／大橋新太郎氏の知遇／日露戦争実記を編纂する／満州従軍／博文館印刷工場の火災／従軍回顧	第4編 「日露戦争前後」 大橋図書館／大橋新太郎氏漸く多忙／日本漫遊案内／第一回の琉球観光／南支那瞥見／最初の台湾瞥見と其帰途／日露戦争実記／満州従軍／博文館印刷工場の火災／京釜鉄道全通式／第二軍記念会／陸海軍名士の知遇／	第6編 「日露戦争時代」 日露戦争実記創刊／第二軍へ従軍／遼陽の包囲攻撃機／博進社印刷工場の火災／旅順陥落の際／~~京釜鉄道全通式祝賀会~~／日本海海戦の大勝の際／日露戦争と博文館／~~牛込北山伏町現邸購求~~／大橋新太郎君の好意上地邸宅所有／
40歳代後半から50歳代前半	第5編 「東京市政熱中時代」 東京市立図書館設立に努力さる／東京市電車市営論に活躍さる／欧米漫遊／東京市上水道水源の植林を視察さる／明治の終り／大正天皇即位の際表彰さる／牛込区政関係の事蹟／欧州大戦勃発の際／帰省と入浴の旅／朝鮮の全国記者大会に出席／	第5編 「東京市政熱中時代」 東京市立図書館の由来／新潟県加茂町立図書館由来／吉野熊野の春／東京市電車市営論議／吉野熊野の春／欧米漫遊／東京市上水道水源植林視察／奈良県吉野川水源植林視察／間宮海峡と黒龍江／思い出多き明治四十四年／第一回樺太遊覧／久留米付近の陸軍特別大演習／九州西南従横跋渉／山陰道遊覧／明治天皇崩御／牛込区政関係事績／欧州大戦勃発の際／日本図書館協会九州大会／帰省と入浴の旅／朝鮮の全国記者大会／大正天皇御即位の際の表彰／	第7編 「内外~~遊歴~~雄飛時代」 図書館設立運動／東京市立図書館創立由来／新潟県加茂町立図書館由来／世界一周の旅／坪谷忠三の結婚／台湾縦貫鉄道全通式に臨む／東京市水道水源視察／奈良吉野川上流造林業視察／明治四十三年の関西遊覧／間宮海峡黒龍江航行／其頃身辺への悲喜事項／東北北海道樺太の旅／九州陸軍大演習陪観／半開通の山陰線鉄道試乗／牛込区議会議員としての遺業／咽喉の治療皆な無効／第一次欧州大戦勃発の当時／大正四年の南船北馬／寺内朝鮮総督始五年記念会／未来の南方共和圏視察／
50歳代後半から60歳代前半	第6編 「波瀾時代」 衆議院議員選挙に落選／大橋図書館長に就任／始めての会社重役に失敗／衆議院議員に再び落選／後藤新平伯を東京市長に推薦／関東大震災当時／	第6編 「波瀾時代」 南洋・後年の大東亜戦場巡り／山形県の図書館大会／衆議院議員落選／博文館隠退・大橋図書館長就任／始めての会社重役失敗／種々な資格の四国，九州巡回／新潟県の図書館大会／坪谷英五郎西比利亜出征／西比利亜出兵の際／浦潮斯徳要塞見物／西比利亜従軍／衆議院議員再び落選／満州の日本図書館大会／北支那の旅／後藤新平伯を東京市長に推薦／奈良和歌山両県図書館大会／瀬戸内海の船中大会／日本郵船会社の海上舟遊会／関東大震災大橋図書館焼失／勲五等に叙せられる／	第8編 「波瀾時代」 衆議院議員立候補落選／博文館辞職及大橋図書館長就任／早稲田大学の騒動／早稲田大学諸会社関係の失敗／其他の会社役員関係／大正六年の四国，中国，九州巡り／新潟県の日本図書館協会大会／近江八景巡り／坪谷英五郎陸軍航空兵科入り／日本図書館協会大会準備の満州行／出兵中の西比利亜視察／再び衆議院議員に落選／日本図書館協会の満州大会／東京市長に後藤新平伯推薦運動／大正十年の京畿歴巡／瀬戸内海の船中大学／奇跡的なる敬神の感激／日本郵船会社の海上船遊／関東大震火災／坪谷商会の蹉跌／勲五等に叙せらる／叙勲祝賀家族同伴旅行／大正十三年の九州兎飛あるき／八丈島奇聞／小笠原島遊覧／

第1冊は第1編から3編，第2冊が第4編から6編，第3冊以降は1冊1編の単位で構成され，全6冊10編で構成されている。第1冊目の最初の表紙には『回顧八十二年録』と記されている。昭和18年(1943)8月31日付の結語では，坪谷自身が，この自伝を書き始めたのは，昭和16年(1941)の春，昭和18年(1943)の秋には82歳までの一代記をほぼ書き終えたと述べている。

『回顧八十五年』の第1編の表紙の裏にとじ込まれた，昭和21年(1946)4月6日付の坪谷善四郎宛の書簡によると，後援会の大谷会長，押見顧問を中心に伝記編纂準備が進められていた。序文

第2表　つづき

時期	『水哉坪谷善四郎先生傳』[5] （昭和24年刊）	『回顧八十五年』[35] 昭和21年執筆（加茂市立図書館蔵）	『水哉自伝旅ころも』[33] 昭和18年執筆（三康図書館所蔵）
60歳代前半から70歳代前半	第7編 「大橋図書館復興時代」大橋図書館の復興に着手さる／早稲田大学生就職顧問となる／復興の大橋図書館開館／大橋図書館の内容充実に努力さる／大橋図書館の書庫を増築さる／大橋図書館の栄誉と四十年史の編纂／	第7編 「大橋図書館復興時代」 大橋図書館焼失の損害／復興に着手／早稲田大学生就職顧問／八丈島と小笠原遊覧／福岡市の図書館大会／伊勢と出雲と参拝の感激／那須温泉殺生石の句碑／復興の大橋図書館開館／台湾の図書館大会ならびに霧社蕃界の見学／台湾南端巡り／朝鮮金剛山探勝／新羅の古都址慶州／大橋図書館の内容充実／所謂二・二六事件と大橋図書館／大橋図書館の書庫増築／大橋図書館の表彰及四十年史／	第9編 「早稲田大学嘱託時代」 早稲田大学の人事嘱託／大正十四年四国一周の旅／大橋図書館の復興／熱海温泉に毎年の越年／東北巡りと亡き父母の法要／妙高温泉と関係の由来／昭和二年の関西九州巡り／今上陛下御即位御大礼の恩沢／台湾縦横跋渉の旅／昭和五年山陰北陸地方巡回／朝鮮金剛山探勝／ 昭和六年東北北海道地方巡回／信越温泉巡り／妻の病死／昭和七年ハ事故多き年／博文館の再新築と大橋佐平翁伝／昭和八年の東海道沿道歴訪／日本書籍会社取締役選任問題／昭和九年の東北信越各都市歴訪／早稲田大学人事嘱託辞任／
70歳代前半から80歳代	第8編 「晩年の先生」 令閨の御逝去／日本書籍会社取締役に就任さる／明治天皇布哂天覧聖績記念碑について／博文館の新築と五十年史／随筆回顧集出版と喜寿記念帖／幸福なる御家庭／壽杖及鳩杖を贈らる／石黒子爵並びに大橋新太郎氏の長逝／博文館取締役並に大橋図書館長辞任／戦時中の先生／先生の現在／先生の横顔／	第8編 「晩年」 妙高温泉と関所址御野立所　／妻ミネ子死亡／日本書籍会社取締役／三書籍会社重役の鮮満視察／朝鮮の旧王宮／奉天視察／明治天皇布哂天覧蹟記念碑／博文館の新築と五十年史／加茂町立図書館新築落成／随筆回顧録と喜寿記念帖／大橋新太郎氏逝去／博文館取締役引退／大橋図書館長辞任／東京空襲稲毛へ疎開／東京の自宅強制疎開／半年間の故郷生活／東京旧住宅跡の仮屋／再び稲毛の小天地／自分の外貌と内容／付録名誉職と表彰一覧／回顧八十五年の終りに／	第10編 「図書館専念時代」 博文館五十年史編纂着手／三書籍会社重役の鮮満視察／熊野三山巡拝／佐渡巡りと北陸温泉歴訪／明治天皇布哂天覧蹟記念碑樹立／石黒子爵自伝の編纂／博文館五十年史出版／昭和十二年二回の病気／喜寿記年随筆回顧集出版／加茂町立図書館愈よ設立／坪谷正二の結婚／其他余が養成せる一門／聖代の恩沢／余が負傷と大橋新太郎氏の厚誼／龍門社の壽杖と東京市の鳩杖／大橋図書館四十年史編纂／趣味と嗜好／余が俳句の由来／余が家の宗教と信仰／結語／

によると，『水哉坪谷善四郎先生傳』[5]は昭和23年(1948)に脱稿，坪谷自身の加朱の段階に入っていたが，推進していた大谷会長の死去，経済の変動による資金不足などで刊行が大幅に遅れ，坪谷の死去には間に合わず昭和24年(1949)12月に刊行されている。

第2表に，特に図書館に関連の深い40歳代頃以降の時代を取り上げ，日露戦争前後から東京市政熱中時代，波瀾時代，関東大震災後の大橋図書館復興時，晩年にかけての『水哉坪谷善四郎先生傳』[5]『回顧八十五年』[35]『水哉自伝旅ころも』[33]の目次の比較表を示した。坪谷の死後に刊行されたのが，表左側の『水哉坪谷善四郎先生傳』，その3年前に中央の加茂市立図書館所蔵の『回顧八十五年』，さらに3年前に右の三康図書館が所蔵する『水哉自伝旅ころも』が執筆されている。

第2表に示したように『水哉自伝旅ころも』の目次部分には，第6編「日露戦争時代」の6項目目「~~京釜鉄道全通式祝賀会~~」，9項目目「~~牛込北山伏町現邸購求~~」のように棒線を用いた抹消が加えられ，校正のあとがみられる。また，第7編の5項目目「坪谷忠三の結婚」のような私生活にかかわる要素の強い項目は，『回顧八十五年』や『水哉坪谷善四郎先生傳』には挙げられていない。「波瀾時代」にあたる項目数を比較してみると『水哉自伝旅ころも』では25項目，『回顧八十五年』では20項目を立てているが，『水哉坪谷善四郎先生傳』は6項目に整理され，目次の

簡略化が行われている。『水哉自伝旅ころも』では「波瀾時代」に続く章を「早稲田大学嘱託時代」と名づけているのに対し，『回顧八十五年』と『水哉坪谷善四郎先生傳』では，時期を妻の病死の時期で区切り，「大橋図書館復興時代」としている。

『水哉自伝旅ころも』と『回顧八十五年』は坪谷が記した自筆回顧録，自叙伝であり，『水哉坪谷善四郎先生傳』は坪谷の業績を顕彰するために加茂町立図書館後援会が作成した伝記であるという相違がある。第2表の目次の比較からもわかるように，『水哉自伝旅ころも』の内容にさらに修正と追加を加えた資料が『回顧八十五年』であり，目次や内容からみて加茂町立図書館後援会による伝記である『水哉坪谷善四郎先生傳』は，『回顧八十五年』を素材に執筆されたと考えられる。

6.　絵葉書集，色紙等

絵葉書は，ポストカードアルバム帳に張り付けられている。坪谷が世界各国を巡回し自身で収集した絵葉書や先輩知友から送られた絵葉書である。トルコの絵葉書集の表紙裏には，この絵葉書集が明治42年(1909)に坪谷が執筆した『世界漫遊案内』[36]と関連が深く参考になるものなのでぜひ交互に参照してほしいと書いた紙が張り込まれている。

また，表紙に朝野名士絵葉書帖と書いた紙を張った絵葉書集には，「名士絵葉書帖百八枚新潟県出身名士及文壇政界各士多数アリ散逸最モ注意ノ事」という注意書きが付されている（写真14）。

博文館関係の絵葉書としては，明治39年(1906)4月22日落成した新築の博文館の建物と大橋新太郎の写真，博文館創業20周年記念のものが含まれている。絵葉書には，博文館の当時の店頭の風景が描かれている。その店先には博文館の名前入りの運搬用の馬車が停まっている（写真15）。

絵葉書集には，イギリスやイタリア，アメリカ，ヨーロッパなどの外国風景や日本の名所の観光風景だけではなく，大洪水の絵葉書（写真16）なども含まれている。明治43年(1910)8月都下稀有の大洪水とある2枚の絵葉書のうち，1枚は向島堤防決潰後工兵隊臨時架橋，もう1枚は本所陸軍被服所前通の浸水という説明が付され，一面に浸水した通りを行きかう人々の様子や被害の大きさが表されている。

絵葉書集のほかに，坪谷が所蔵していた，児童文学者で小説家，俳人の巌谷小波(1870–1933)，詩人で評論家でもあった相馬御風(1933–1950)，万葉の世界を描いた日本画家で歌人の大亦観風(1894–1947)等の色紙類も残っている。

7.　名士書簡類

坪谷関係の名士書簡類は12袋に分けて保存されている。加茂市立図書館による仮一覧表が作成されているのみで，書簡は封筒に入っていたり，書簡はなく封筒だけのものなど多量におよび総数は不明である。年代的には明治から昭和期にわたり，日付不明のものもみられる。差し出し人は，政界名士や詩人，画家など多方面で資料の形状も便箋や巻紙のものもあり，多様である。

三康図書館所蔵の回顧録『水哉自伝旅ころも』[33]の第10編「博文館五十年史編纂着手」によると，明治30年(1897)頃より政治家，軍人，学者たち諸名士から送られた未表装の書簡類が当時すでに数百通に及んでいた。加茂市立図書館が所蔵する書簡類がこのうちのどの程度であるかは不明であるが，ほとんど坪谷善四郎あての書簡で，坪谷の交友範囲を物語るように，幅広い人脈にわたる。坪谷が大正12年(1923)6月に，早稲田大学から就職顧問として大学生の就職斡旋を嘱託され，官公庁や銀行，会社，新聞社などを歴訪して就職を依頼していたこともあって，交流範囲は極めて広範囲にわたっている。

たとえば政治家関係では，明治・大正時代の内務官僚で東京府知事でもあった井上友一(1871–1919)，自由通信社相談役で衆議院議員の小高長三郎(1890–1958)などもみられる。医学関係では台湾総督府医学校長を務めた高木友枝(1858–1943)，大橋図書館の初代館長で陸軍軍医総監の

写真 1　自筆日記

写真 2　明治 37 年自筆日記見返部分

写真 3　明治 37 年自筆日記本文 3 月 7 日

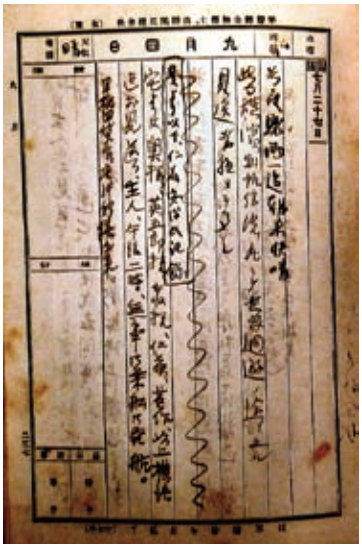

写真 4　明治 40 年自筆日記 9 月 4 日本文

写真 5　自筆日記に張り込まれた坪谷水哉印譜

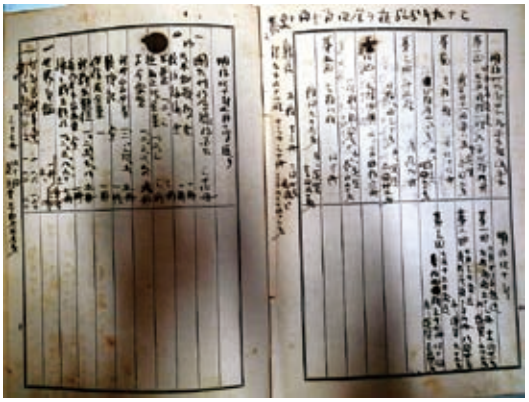

写真 6　自筆日記巻末加茂図書館送付図書リスト

写真 7　水哉雑稿

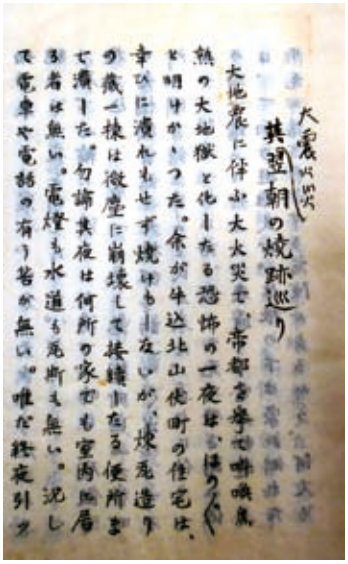

写真 8　大震火災其翌朝の焼跡巡り

写真 9　大橋図書館の焼失

写真 10　加茂町立図書館寄贈台帳

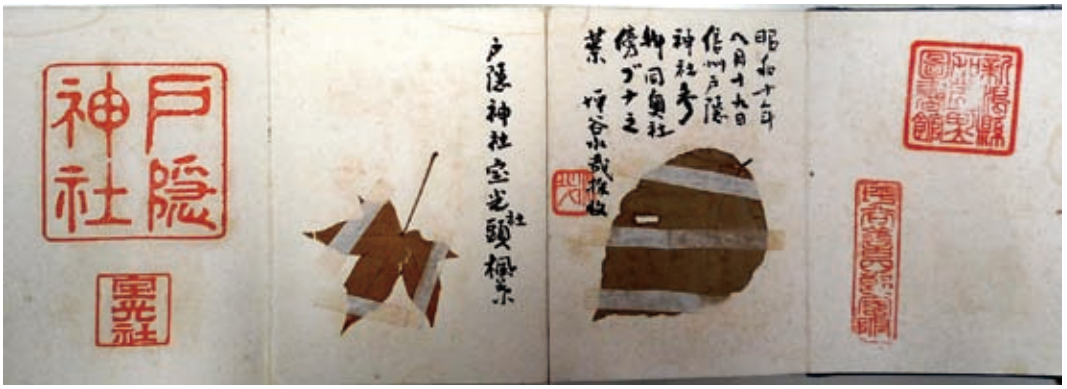

写真 11　旅の家づと

写真 12　坪谷撮影の写真集

写真 13　回顧八十五年

写真 14　絵葉書集

写真 15　博文館創業 20 周年記念絵葉書*
*新築せる博文館　明治 39 年 4 月 22 日落成 （絵葉書掲載協力　博文館新社）

写真 16　絵葉書集（東京都下の洪水）

石黒忠悳 (1845–1941)，軍部関係は陸軍の大山巌 (1842–1916)，海軍大将の黒井悌次郎 (1866–1937) の名もみえる。弁護士で登山家，高山植物収集家であった城数馬 (1864–1924) や外交官の陸奥広吉 (1869–1942)，内田文庫でも知られ，台湾総督で明治期の通信官僚であった内田嘉吉 (1866–1933) も含まれる。教育関係では，教育家の鳩山春子 (1861–1938)，近代の美術行政官，東京美術学校長を務めた正木直彦 (1862–1940) もみられる。外国人ではジャーナリスト，啓蒙思想家でのちに北京図書館長を務めた梁啓超 (1873–1929) の名もある。

博文館関係の詩人や作家としては，俳人の高浜虚子 (1874–1959)，内藤鳴雪 (1847–1926) がみられる。小説家で評論家でもある坪内逍遥 (1859–1935)，著述家で図書館長であった市島謙吉 (1860–1944) や文芸評論家で政治家，早稲田大学総長であった高田早苗 (1860–1938)，実業家で政治家である堤康次郎 (1889–1964) などはいずれも早稲田大学関係者である。

内容的には，図書や雑誌の恵贈，雑誌寄稿の件や年始の挨拶，回顧集送付のお礼などが多い。自筆日記にみられる年賀状発送人名簿や年始回り等の名簿と合わせ，坪谷をめぐる人脈や交友関係を調査するうえでの重要な資料であり，今後詳細についての調査が必要である。

III. 坪谷善四郎関係資料の意義

A. 歴史的事実の確認

加茂市立図書館所蔵の坪谷善四郎関係資料の一つの意義として，坪谷善四郎に関する歴史的事実の確認が可能であることを挙げることができる。坪谷の旅日記などの記述と比べると自筆日記の文章は簡潔で短い。その内容は本人の内面的心理を書き残したものではなく，備忘録的な役割を果たしていた。すでに述べたように，東京市議会において，東京市立図書館設立建議が可決された日に，坪谷が果たしてどのような日を送ったのか，その歴史的事実を確認することができる。

また坪谷の日記が図書館史研究の範囲を超えて研究されている例もみられる。平成 19 年 (2007) には『災害と資料』の中で，「坪谷善四郎書翰・日記にみる一八九四年東京地震・一八九五年茨城県南部の地震」と題した論文[37] が発表されている。新潟大学附属図書館が所蔵する本田巻家文書中にある，田巻三郎兵衛宛坪谷善四郎の書簡における地震の記述に着目し，坪谷の自筆日記により歴史的事実の確認を行った例である。この例のように図書館分野にとどまらず，坪谷の残した一次資料は貴重なものであり，今後幅広い分野で役立つ一級史料ということができる。

B. 史実の修正と新たなる史実の発見

『回顧八十五年』第 6 編に，「新潟県の図書館大会」と題した文章がある。坪谷は大正 7 年 (1918) 6 月に郷里の新潟県で開催された，第 13 回全国図書館大会の終了後，徳川頼倫候に随行して加茂を訪れた。徳川頼倫候は徳川幕府御三家の旧紀州藩主で，自ら南葵文庫を創設し日本図書館協会総裁を務めた人物である。加茂駅で，徳川候と坪谷を有力者十数人が出迎えたものの，案内すべき図書館がないため，無関係な青海神社を参拝し，同境内の公園を散策，その夜は新潟に泊まったと記している。坪谷が提唱した図書館を奨励するために，遠路から臨まれた徳川侯爵に案内すべき図書館がなかったことに，坪谷はすこぶる困惑し，何とも遺憾であったと述べている。

一方，大正 15 年 (1926) 5 月の『図書館雑誌』所収「北越各地随行の追憶」[38] の中の「加茂図書館の光栄」と題した文章では，徳川候が坪谷の郷里，加茂町立図書館に臨まれ，同時に青海神社を訪れたとある。また，加茂町立図書館について，坪谷は蔵書数わずかに 3,000 冊くらいで小学校内に付設した極めて小規模な図書館で，坪谷の寄付で成り立っていると説明している。「第十三回全国図書館大会記事」[39] の「大会後の徳川総裁」には，6 月 10 日に徳川総裁は加茂に赴き，青海神社に参拝，町立図書館および絹織工場などの巡覧を遂げられたとある。また，『回顧八十五年』の 3 年前に書かれた，三康図書館所蔵『水哉自伝旅ころも』第 8 編「新潟県の日本図書館協会大会」では，徳川候が加茂町に下車し町立図書館を一覧

し，青海神社を参拝，地方有志に面会したことで，徳川候の坪谷に対する思いやりに深く感謝したとつづっている。『図書館雑誌』や『水哉自伝旅ころも』と『回顧八十五年』の記述には矛盾がみられる。果たして，加茂町立図書館はどのような状況だったのだろうか。

『日本公共図書館の形成』[24]には，加茂町立図書館が明治37，38年（1904，1905）の地方における町立図書館の設立例として取り上げられている。同町出身の坪谷善四郎が図書館設立を条件に図書または金子を寄贈するとの申出をして設立したが，その時期が戦役記念事業の機運と合致したものであろうとしている。『近代日本図書館の歩み地方篇』[40]は，明治年代の新潟県最初の図書館は明治39年(1906)の加茂町立図書館であると記されている。

『回顧八十五年』第5編の「新潟県加茂町立図書館由来」によると，東京市立図書館設立を東京市会に建議した坪谷は，郷里加茂にも図書館を設立することを希望し，明治39年(1906)1月27日付で笠原永昌加茂町長に設立を申請した。同年4月5日には図書721種948冊（価格金241円98銭）が送られた。価格は大橋図書館出入りの古本商に評価させた。加茂町からは同町小学校内に同年9月24日に開館したという通知があり，坪谷はその後も図書の寄贈を続け，大正2年(1913)10月までに第1回の1,000円分の寄付を完了，さらに第2回を昭和5年(1930)9月に完了し，その後も寄付を続けた。しかし，この図書館は小学校の一室に設けられただけで公開されず，閲覧者は主として同校職員に限られていた。後に同校の都合で寺院やほかの小学校に移転され，寄贈資料は厄介扱いされたばかりでなく，この間に貴重な資料の散逸が生じていた。坪谷は博文館の雑誌『太陽』を第1巻から終巻まで500余冊を寄贈したが，10分の1も残っていなかったとある。『水哉坪谷善四郎先生傳』も加茂市立図書館が有名無実であったとしている。

当時の経過を裏づける文章が，明治39年(1906)の自筆日記巻末の当用日記補遺に残されている。「寄付願」「加茂町図書館寄付方法」と題した文章によると，坪谷は加茂町に対して加茂町立図書館が日露戦役記念に適当な場所に建設されること，有志者による寄贈があった場合は，受け入れて保管し，蔵書の充実を図ることを希望して寄付申請をした。「明治三十七八年加茂町立戦役記念図書館」と題した文章では，「加茂市立図書館由来」には記されていない坪谷の構想が記されている。職員は無報酬で，館長および幹事は年当を給す。閉館日は年末年始（12月28日～1月5日），館内掃除毎月1回，曝書期（8月中10日間），紀元節，天長節，村社祭とする。縦覧日時は，季節により異なり，午前午後を想定して，11月から3月は午前9時から午後8時，4月から6月は午前8時から午後9時，7月から9月は午前7時から午後9時とある。

明治35年(1902)6月開館の大橋図書館の例では，開館当初は昼間のみの開館，経験により昼間にくる暇のない人々が多いことを考え，明治36年(1903)8月には夜間開館も実行した。毎年4月から10月まで，新聞雑誌室だけに限り，午後6時から9時まで開館，新聞雑誌と数学，理学，医学，法学に関する図書を閲覧することができた[12]。

日比谷図書館の開館時間は「東京市立日比谷図書館規則」[41]によると，4月から9月が午前8時から午後9時，10月から3月までが午前9時から午後8時までであった。また，閉館日は年末年始，紀元節，市役所開庁日，天長節，館内掃除日（毎月20日），曝書期（9，10月中およそ10日間）である。いずれも坪谷が郷里に実現しようとした加茂町立図書館の構想と類似している。明治39年(1906)の自筆日記巻末の加茂町立図書館構想では，坪谷は職員のいる独立図書館で夜間開館を実施する本格的な図書館を標榜していたが，実際の加茂町立図書館の状況は全く異なっていた。

『水哉坪谷善四郎先生傳』には，坪谷がなんとかして専任の職員を置く独立した町立図書館を建設しなければならないと考え，本格的な加茂町立図書館の建設を町に申請したとある。図書の寄贈だけではなく，建設資金として現金10,000円の寄付を行い，町長や町会議員の奔走で，加茂町も寄付を受理し町会で可決して，ようやく昭和16

年 (1941) 4 月の本格的な図書館の開館に結びついた。

この間の加茂町の対応について，『加茂市史』[42] は次のように記している。町立図書館は，坪谷の金 1,000 円又は同価格の図書を寄付するという申出を受け，町議会が図書の寄付を申し入れ，明治 39 年 (1906) 9 月 24 日，加茂第一尋常小学校の一室を図書館として開館した。坪谷はその後も絶えず図書や雑誌を寄贈し，大正 2 年 (1913) 10 月までに約束の 1,000 円の図書寄贈を完了，さらに次々と図書の寄贈を続けた。しかし，同図書館は学校新築移転などのために大昌寺や南小学校に移った。昭和 11 年 (1936) 1 月坪谷は町立図書館建設資金のうち，10,000 円の寄贈（内金 5000 円即納，残金工事着手時納付）を申し出た。当時の加茂市の財政状況は大正 15 年 (1926) の大水害復旧工事借入金などで逼迫しており，寄付を受けても町立図書館新築はできない状況にあった。しかし，坪谷の要望と町議会の強い要請により，当時の丘山堅町長は老朽化した役場の新築計画を取りやめて，図書館新築に着手した。昭和 16 年 4 月 10 日に，本館（木造 2 階建 45 坪），付属屋（木造平屋 30 坪），書庫（土蔵造 2 階建 12 坪）が開館した。蔵書数は昭和 17 年 (1942) 3 月末で 2,950 冊，昭和 23 年 (1948) 3 月末に 7,544 冊であった。

大橋図書館主事竹内善作の「賀茂町立図書館の更生」[43] にも，明治 39 年 (1906) 設置されたが，独立の建物がなかった町立図書館を更生し，昭和 15 年 (1940) 11 月 7 日に竣工式が実施されたとある。竹内は，坪谷の『随筆回顧集』[6] の記述を引用し，従来の町立図書館は一般公衆が十分に利用できないような管理方法下に置かれ，管理場所も転々として移動していたと述べている。また，この図書館の更生は，坪谷と丘町長，特に永井建設委員長の犠牲により実現したと述べている。

郷里に公衆の利用に供する図書館を設立するために，坪谷が多量の図書や雑誌を寄贈し続けていたことは，自筆日記巻末などに残された寄贈記録や大正年間から昭和 15 年 (1940) の「加茂町立図書館寄贈台帳」で裏づけられる。また，図書館史上で，明治 39 年 (1906) という早い時期に新潟市の公立図書館として最初に開館したとされている，加茂町立図書館が実は一般公開されず有名無実の状況が続いていたこと，昭和 15 年 (1940) の新築開館を契機に専任職員を配置した独立図書館として公開可能になるまでの経過を，坪谷善四郎関係資料の複数資料から立証することができる。

是枝 [4] は，第 II 章 C 節雑稿類で触れた『水哉雑稿　別冊一』中に含まれる未発表資料「農村図書館の経営」を取り上げ，全文を紹介して坪谷の農村図書館振興策について論じている。昭和 62 年 (1987) 7 月に発表されたこの論文 [4] では，加茂市立図書館所蔵の坪谷善四郎関係資料のうち，未発表の「農村図書館の経営」のみが限定して紹介された。是枝は，昭和 61 年 (1986) 8 月に清水正三および森崎震二とともに坪谷善四郎の遺稿集や日記など百数冊に及ぶであろう水哉文書が，加茂市立図書館の書庫に眠っているのを探し当て，論文・日記類のコピー（入手・整理した分は全量のほぼ半分）を閲読したと報告している。この場合のように，坪谷の残した日記，雑稿類，書簡類など，さまざまな資料をよりきめ細かく調査し，共通点や相違点を分析することにより，「農村図書館の経営」のようなこれまで紹介されたことのない坪谷の図書館論に関する文献や図書館史にとって重要な新たな発見を見いだすことも可能である。坪谷善四郎関係資料は，公刊された資料の史的事実の確認だけではなく，これまで知られていない未発表の新たな可能性をも秘めた重要な資料ということができる。

IV. おわりに

これまでみてきたように，坪谷善四郎関係資料は豊かな内容を持ち，大橋図書館や東京市立図書館をはじめとする，わが国図書館史研究の第一級史料である。坪谷の加茂町立図書館創設の例のように史実の訂正や確認だけはなく，図書館設立過程や坪谷の図書館構想を知ることができる。『回顧八十五年』のように，公刊された資料『水哉坪谷善四郎先生傳』の素材となった資料や，坪谷自身により校正が加えられ，その校正経過がわかる自筆日記や雑稿類が残されており，新たな研究の

可能性を持つ資料である。しかし，第 III 章 B 節で述べたように，坪谷善四郎関係資料は昭和 62 年 (1987) 7 月に紹介されて以後，わが国図書館史研究に十分には生かされてこなかった。資料自体，未整理のままである。

本稿では，坪谷善四郎関係資料の概略を報告し，その重要性と価値を明らかにした。今後も書簡類を含めた坪谷善四郎関係資料の調査や検証を続け，坪谷が意図した一次資料のいっそうの活用，研究を通して坪谷が図書館史上に果たした役割を明らかにしていきたい。

謝　辞

本研究は，平成 18 年度 (2006) 三田図書館・情報学会研究助成金の助成を受けて行いました。本稿執筆にあたり，坪谷善四郎関係資料の閲覧および調査を許可してくださった，新潟県加茂市立図書館の皆様，博文館絵葉書写真掲載に関してご協力をいただいた博文館新社，ご指導いただいた慶應義塾大学文学部田村俊作教授に心より感謝いたします。

注・引用文献

1) “坪谷善四郎”．大正人名辞典．第 3 版，東洋新報社，1918, p. 1452.
2) 藤野幸雄．図書館史・総説．勉誠出版，1999, p. 168.
3) 受彰十有五回：坪谷翁の紺綬褒章拝受まで．図書館雑誌．1941, vol. 35, no. 8, p. 52.
4) 是枝英子．坪谷善四郎の農村図書館論：未発表論文『農村図書館の経営』を読んで．専修大学図書館学・司書課程年報．1987, no. 3, p. 5–23.
5) 水哉坪谷善四郎先生傳．加茂町立図書館後援会，1949, 257p.
6) 坪谷善四郎．随筆回顧集．博文館，1938, 380p.
7) 坪谷善四郎．博文館五十年史．博文館．1937, 334, 218p.
8) 石井敦．日本近代公共図書館史 40．ひびや．1980, no. 129, p. 44–47.
9) 坪谷善四郎．大橋佐平翁伝．博文館，1932, 242p.
10) 三康図書館．“大橋図書館について”．http://www.f2.dion.ne.jp/~sanko/ohashitoshokan.html, (参照 2009-03-25).
11) 永濱薩男．大橋図書館のこと．名著サプリメント，1991, vol. 4, no. 6, p. 34–35.
12) 坪谷善四郎．大橋図書館四十年史．博文館，1942, 306p.
13) 坪谷善四郎．東京市立図書館論．東京教育時報．1902, no. 25, p. 8–12.
14) 五十年紀要．東京都立日比谷図書館，1959, 103p.
15) 市立日比谷図書館開館式．東京市教育会雑誌．1908, no. 51, p. 45.
16) 斉藤京子．激しく扉を叩くのはだれ：「図書館雑誌」に見る日比谷図書館開館．ひびや．1994, no. 143, p. 19–28.
17) 坪谷善四郎．東京市立図書館創立の由来．図書館雑誌．1935, Vol. 29, no. 12, p. 5–7.
18) 今澤慈海．大禮記念図書に就きて．市立図書館と其事業．1922, no. 7, p. 2.
19) 石井宗次．“坪谷先生と図書館事業”．坪谷先生喜寿記念著作集．竹内善作編．大橋図書館，1938, p. 75-82.
20) 日本図書館協会編．近代日本図書館の歩み　本篇．日本図書館協会，1993, 818p.
21) 佐藤政孝．市民社会と図書館の歩み．第一法規，1979, 521p.
22) 佐藤政孝．東京の図書館百年の歩み．泰流社，1996, 316p.
23) 石井敦．図書館の発見：市民の新しい権利．日本放送協会，1973, 258p.（NHK ブックス，194）.
24) 永末十四雄．日本公共図書館の形成．日本図書館協会，1984, 352p.
25) 奥泉和久．“第 5 章：公共図書館の出現”．公共図書館サービス・運動の歴史 1：そのルーツから戦後にかけて．日本図書館協会，2006, p. 138–142.（JLA 図書館実践シリーズ，4）.
26) 森崎震二，是枝英子．明治期の図書館論について：坪谷善四郎と雑誌『太陽』の論調．専修大学図書館学・司書課程年報．1988, no. 4, p. 10–33.
27) 竹内善作．坪谷水哉翁逝く．図書館雑誌．1949, vol. 43, no. 4, p. 53–55.
28) “大橋図書館・博文館資料”．三康図書館蔵書目録国書編．三康文化研究所，1979, p. 347–354.
29) “大橋図書館年表（稿）”．大橋図書館四十年史．復刻版，博文館新社，2006, 別冊付録 p. 1–15.
『大橋図書館四十年史』復刻版別冊付録の大橋図書館年表（稿）によると，昭和 19 年 (1944) 3 月 30 日に加茂町立図書館へ貴重書を疎開「主事並横川助手疎開図書を携行新潟県加茂町立図書館へ出張」，昭和 20 年 (1945) 3 月 16 日には「貴重図書の疎開に関する用務をもって参事新潟県加茂町立図書館へ出張」とあり，その前日に加茂町立図書館星野司書が来館，翌 17 日に加茂町立図書館長から，書庫使用の許可を得た。しかし，再び 4 月 10 日星野司書が来館し，貴重書の疎開の件は，運搬の関係上一時実行不可能の旨申し入れたとある。
30) 当用日記の明治 27 年版（明治 26 年 11 月 8 日発

行）には，「明治 27 年版金原版「当用日記」 ※最初の当用日記定価三十五銭」と書かれたメモが挿入されている。坪谷善四郎関係資料に残されている当用日記は，明治 29 年版までが金原版，明治 30 年版（明治 29 年 10 月 29 日発行）から博文館発行となっている。
31) 坪谷善四郎．“博文館小史”．大橋佐平翁伝．博文館，1932, p. 175–242.
『大橋佐平翁伝』付録の博文館小史では，明治 28 年 (1895) 末に 29 年用の『懐中日記』定価 1 冊 10 銭を発行，好評のため翌 30 年用には『懐中日記』のほかに『当用日記』を 2 種，上製金 35 銭，並製金 25 銭で発売したとある。当用日記の出版に関連する，出版史上でも重要な資料が含まれている。
32) 坪谷善四郎．大橋図書館の焼失．図書館雑誌．1923, no. 54, p. 9–12.
33) 坪谷善四郎．水哉自伝旅ころも．坪谷善四郎，1943, 6 冊.
34) 日清戦争実記．1–50 編　博文館．1894–1896.
35) 坪谷善四郎．回顧八十五年．坪谷善四郎，1946, 8 冊.
36) 坪谷善四郎．世界漫遊案内．博文館，1909, 692p.
37) 矢田俊文．坪谷善四郎書翰・日記にみる一八九四年東京地震・一八九五年茨城県南部の地震．災害と資料．2007, no. 1, p. 12–14. http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/6021/1/07_0002.pdf,（参照　2009-03-25）.
38) 坪谷善四郎．北越各地随行の追憶．図書館雑誌．1926, no. 80, p. 13.
39) 第十三回全国図書館大会記事．図書館雑誌．1918, no. 36, p. 43–59.
40) 日本図書館協会編．近代日本図書館の歩み　地方篇．日本図書館協会，1993, p. 272–285.
41) “第四　東京市立日比谷図書館規則”．東京市立日比谷図書館一覧：自明治 41 年至同明治 42 年．東京市立日比谷図書館，1909, p. 10–12.
42) “第 6 節：図書館と高等学校”．加茂市史上巻．新潟県加茂市，1975, p. 1026–1028.
43) 竹内善作．賀茂町立図書館の更生．図書館雑誌．1940, vol. 34, no. 12, p. 41–42, 61.

要　　旨

【目的】本研究の目的は，新潟県加茂市立図書館が所蔵する坪谷善四郎関係資料の概略と特色を把握し，その図書館史研究上の意義を明らかにすることにある。坪谷善四郎は大橋図書館（現三康図書館）の図書館長を務め，東京市議会議員として，東京市立日比谷図書館の設立に貢献した人物として知られている。

【方法】加茂市立図書館所蔵坪谷善四郎関係資料の調査を実施し，その資料種別，各種別の内容および特色，保存状態を検討した。さらに，現在三康図書館が所蔵する坪谷善四郎関連資料と比較し，現存する坪谷関係資料の全容を推定した。

【結果】加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料とは，坪谷が郷里加茂に寄贈した自筆資料や坪谷収集資料類である。自筆日記，雑稿類，加茂町立図書館寄贈台帳，写真集・アルバム・旅手帳，回顧録，絵葉書集，名士書簡類などからなる。たとえば，日記と雑稿類は，坪谷自筆の活動日誌や雑誌などに掲載した原稿類を集めたものである。それぞれ推敲や修正の形跡がみられ，図書館史上の歴史的事実を確認することや，坪谷の思考のプロセスをたどることができる。今回の調査の結果，坪谷善四郎関係資料は，現在未整理のままではあるが，豊かな内容を持ち，東京市立図書館をはじめとする，わが国図書館史研究の第一級史料であることが明らかになった。